

サムエル記下 4 章 1～12 節

2025 年 7 月 9 日(水)

はじめに

本日はサムエル記下 4 章 1～12 節を学びます。ここは、サウル王の遺児でイスラエルの王であるメシュ・ボシェトが暗殺された記事です。

I サムエル記下 4 章 1～12 節の話の流れ。

早速、本日の個所の話の流れを見てみましょう。4 章 1 節は、実力者であったアブネル亡き後のイシュ・ボシェトの様子と全イスラエルの様子が語られています。続く 2～3 節では、イシュ・ボシェトの家臣で、二人の略奪隊の長であるバアナとレカブが紹介されています。また 4 節では、唐突に、サウル王の息子ヨナタンの遺児メフィボシェトについて語られています。そのようにして、サウル王家を継ぐ者たちを紹介しているわけです。

さてここで、サウル王と息子ヨナタンの子どもたちを以下に箇条書きにします。

<サウルの子どもたち>

長男ヨナタン：ギルボア山の戦いで戦死 (I サム 31:2)

次男アビナダブ：ギルボア山の戦いで戦死 (I サム 31:2)

三男マルキ・シュア：ギルボア山の戦いで戦死 (I サム 31:2)

四男イシュ・ボシェト：サウル王の死後、アブネルによってイスラエルの王とされる (II サム 2:8)。

彼は部下によって暗殺される (II サム 4:6)

長女メラブ：メホラ人アドリエルに嫁がせられた。(I サム 18:19)

次女ミカル：ダビデに嫁ぐ (I サム 18:27)。一時、サウル王によって離縁させられ、パルティエルに嫁がせられた (I サム 19:17, 25:44。ダビデはユダの王となり、彼女を奪い返し再び妻として迎える (II サム 3:14, 15)。

<長男ヨナタンの子供>

メフィボシェト：両足が不自由 (II サム 4:2)。

ダビデがイスラエルとユダの統一王国の王となったとき、厚遇される。

サムエル記下 9 章 7 節、13 節によれば、彼はサウルの地所を返還してもらい、ダビデ王の食卓に連なる者とされた。

以上のように、サウル家で生き残ったのは、次女ミカルとヨナタンの息子メフィボシェトだけである (長女メラブの消息を語る記事はない)。かつてアブネルとダビデが構想したように、ダビデ王家のもとでサウル家は存続したわけである。

5～7 節は、バアナとレカブが、イシュ・ボシェトを暗殺した記事です。彼らは、イシュ・ボシェトを殺害すると、その首をダビデのもとにもっていったのです。なお、「アラバ」は、広い意味ではヨルダン地溝帯から死海を経て、アカバ湾に至る所であり、そこには道路がとおっていた。

8～12 節では、ダビデが、このバアナとレカブに対してどのように対応したのかが書いてあります。ダビデは、バアナとレカブが行ったことは、主の御心ではなく、神に逆らう者として断罪し

処刑します。またイシュ・ボシェトを埋葬しています。こうしてサウル王家を継承する者は、ただメフィボシェトだけとなり、事実上、王統は途絶えたのです。

以上のことを箇条書きにすると次のようになります。

1. 4 章 1～4 節 アブネル亡き後のサウル王家について

- (1) 4 章 1 節 イシュ・ボシェトと全イスラエルおびえる。
- (2) 4 章 2～3 節 バアナとレカブについて
- (3) 4 章 4 節 ヨナタンの子メフィボシェトについて

2. 4 章 5～12 節 イシュ・ボシェト暗殺される。

- (1) 4 章 5～7 節 バアナとレカブ、イシュ・ボシェトを暗殺する。
- (2) 4 章 8～12 節 バアナとレカブ、イシュ・ボシェトの首をダビデにもっていくが、悪人として処罰される。

II. サムエル記下 4 章 1～12 節の解説

【1 節】

ここには、アブネルの死後、サウル家の様子が語られています。アブネルはイスラエルの将軍であり実力者でしたので、彼の死は、サウル家に衝撃を与えました。「サウルの子イシュ・ボシェトは力を落とし、全イスラエルはおびえた」のです。つまり、今後、ダビデ家によって滅ぼされるのではないかと考え、恐れたのです。

【2～3 節】

そうした恐れは、イシュ・ボシェトの家臣で略奪隊の長であるバアナとレカブをも捉えたと思っただけです。恐れや不安は、心の中で膨れ上がっていくものです。それに伴って、冷静な状況認識ができなくなります。

【4 節】

また、サウル家には、サウルの子ヨナタンの遺児メフィボシェトがいました。彼はサウル家の王統をひく者であるとはいえ、まだ幼く、しかも障害がありました。両足が不自由なのです。

【5～7 節】

さてそのような状況の中で、イシュ・ボシェトの家臣であるはずのバアナとレカブが、自分の仕える王を暗殺しました。イシュ・ボシェトが家で昼寝をしているときのことです。彼らは「小麦を受け取る振りをして家の中に入り」ました。そして下腹を突き刺して殺したのです。また彼らはイシュ・ボシェトの首を切り落とし、ダビデのもとへと向かいました。

バアナとレカブは、「おびえ」の中で、アブネル亡き後のイスラエルはダビデによって滅ぼされるに決まっていると思い定めました。したがって自分たちもイシュ・ボシェトと共にダビデに滅ぼされると思い込んだわけです。そのため彼らは、自分たちが生き残るにはどうしたよいかと考えたのでしょう。王であるイシュ・ボシェトを殺して、その首をダビデに差し出せば、自分たちはダビデの敵ではないことが明らかとなり、命は助かると考えました。場合によっては、その手柄のゆえに、ダビデに優遇されることも十分あり得ることだと思ったわけです。こうしてバアナとレカブはイシュ・ボシェトを殺害したわけです。

【8～12 節】

さて場面は、ダビデの王宮となります。バアナとレカブは、イシュ・ボシェトの首を手に、ダビデ王の法廷にいます。そして次のようにいうのです。

「御覧ください。お命をねらっていた、王の敵サウルの子イシュ・ボシェトの首です。」そして「主は、主君、王のために、サウルとその子孫に報復されました」といって自己正当化しました。

バアナとレカブの考えでは、サウルとその子イシュ・ボシェトはダビデの敵であり、命を狙う者である、ということでした。だからダビデは、サウルの子イシュ・ボシェトの滅ぼされることを願っているに違いないと決めつけました。

ここに明らかなように、彼らはダビデの考えが全く分かっていませんでした。これまでも、ダビデは、主が王として立てた者を自分が手を下して殺すようなことを考えていません。むしろ自分を殺害しようとするサウルから逃げ回ったのです。それは、主が裁いてくださると信じていたからに他なりません。その意味で、ダビデの逃亡は、彼の信仰告白といってもよいのです。

しかしバアナとレカブはそのようダビデの信仰が全く分かりません。世俗の権力争いと同じように考えました。そして今、自分たちがダビデの敵を倒せば、ダビデによって優遇されると考えたのです。

【9～12 節】

しかしダビデはそのようなことを考えはしません。そこでダビデは彼らに次のようにいって答えました。

①9 節のダビデの言葉を言い換えると、「主なる神は生きておられ、あらゆる苦難からわたしの命を救ってくださった方である。」そのようになります。ダビデは、まず自分の信仰を明らかにしました。言い換えると、世俗の王たちのように、権力争いをし、イシュ・ボシェトを殺して、自分がイスラエル全体の王になることは、一切考えていないということです。

②次にダビデは、まだツィクラグにいたとき、あるアマレク人がサウルの王冠と腕輪を手にして、サウルの死を告げ知らせたことがあったが、それを喜んで受け入れたのではなく、処刑したというのです。

③その上で、「まして、自分の家の寝床で休んでいた正しい人を、神に逆らう者が殺したのだ」というのです。つまり、バアナとレカブは、ダビデの味方だったのではなく、神に逆らう者であると明言しました。こうしてダビデは、彼らを処刑します。

ダビデは、バアナとレカブを殺した上で、両手両足を切り落とし、ヘブロン（ベツレヘン）の池のほとりで木につるしたのです。両手両足を切り落とすのは、残酷ですが、両手はイシュ・ボシェトを殺害した手であり、その首を運んだ手です。両足はダビデのもとにやってきた足です。ですから彼らの罪を明確にした、ということです。このようにしてイシュ・ボシェト殺害は、ダビデの命令によることでも、ダビデが望んだことでもないことを、周囲に示したのです。ヘブロン（ベツレヘン）の池には、人々が水汲みにやってくるからであり、いわば公共の場所だからです。他方、ダビデは、イシュ・ボシェトの首をアブネルの墓に葬りました。おそらく葬儀はアブネルのときのような盛大なものではなかったにせよ、きちんとしたのでしょう。しかしそうした記事は省略しています。

こうしてダビデは、ユダとイスラエルの統一王国の王となっていくようになるのです。確かに主なる神が、ダビデを王とするために働いてくださったのです。

また本日の個所でも、バアナとレカブの世俗的な考え方とダビデの信仰との対比が鮮やかです。わたしたちは、バアナとレカブのように、世俗的に考えます。この世において力の強い者により頼むのです。

これは、今日の教会形成や伝道についてもいえることです。教会を建てることも伝道も、イエス・キリストの御業です。しかしわたしたちは、つつい人間の力に頼ってしまいます。人間の力は、それが経済力にせよ、社会的な影響力にせよ、賞賛すべき知恵であるせよ、目に見えるものであり、人を魅了するものです。そのため人は、つついそうしたものに依り頼むようになります。それが、わたしたち人間の弱さなのです。

そのためにこそ、繰り返してイエス・キリストに導き返していただくのです。イエス・キリストは、「わたしは良い羊飼いです」と宣言しているとおり(ヨハネ 10:11)、迷い出る羊のようなわたしたちを見捨てることなく、導き続ける方だからです。